

上賀茂地域の活性化を目指した賀茂季鷹の 歌碑建立の取り組みに関する考察

Study on Building the Stone Monument of Suetaka KAMO Aimed to
Activating at Kamigamo Area

勝 矢 淳 雄

和文要旨

上賀茂地域は1300年以上の歴史があるが、近年の住宅開発などによって地域の絆が弱くなりつつあるのは、上賀茂地域においても同様である。これまでに多くの伝統行事や文化が継承されてきているが、徐々に衰退の傾向にもある。古くからの伝統行事などには新しい住民は物理的・精神的に参加し難く、これが地域の活性化のための活力を低下させることにも繋がっている。古くからの住民から新しい住民までが、地元である上賀茂地域に愛着と誇りを持って協調していくには、古い伝統を維持していくだけではなく、何か目に見える形での新たな試みを行い、住民が実感しうる礎を作ることが必要であった。このようなことから、賀茂文化研究会は地元の上賀茂自治連合会などに江戸末期の上賀茂が輩出した歌人である賀茂季鷹の歌碑の建立を提案し、実現することが出来た。その経緯と上賀茂地域などへの影響について考察する。

キーワード：賀茂季鷹、上賀茂地域、地域貢献活動、賀茂文化研究会

Key Words: Suetaka KAMO, Kamigamo Area, Community Contribution Movement, Study Group of Kamo Culture

目次

1. はじめに
2. 賀茂季鷹について
3. 歌碑建立までの経緯
4. 考察

1. はじめに

平安京遷都以前から上賀茂地域は賀茂氏が居住していたところであり、長い伝統は歴史に残る多くの人々を輩出し、輝いた時代がある。とくに、平安末期から鎌倉時代の初期までの院政の時代と江戸

時代の後期である。江戸時代の後期には、文人、有職故実家、書家、宗教家、画家などの多くの教養人が活躍し、上賀茂は京都第一の地とまで評された。そのほとんどは、当時の知識階級である社家の出であった。

上賀茂地域には、明治時代に形式的には崩壊したとはいえ、現在に至るも古い身分制度が蔭では色濃く残っており、地域には複雑な人間関係が今なお続いている。江戸時代までの上賀茂神社の神職を世襲制で務めた社家^{しゃけ}は現在も賀茂県主同族会を組織し、地域内外の約 400 軒の子孫の人たちで運営されている。5 月 5 日に上賀茂神社で行われる競馬会^{くらべうまえ}は今も社家の人たちが乗厩(騎手)を務め、運営に協力して開催されている。6 月には社家の人たち(同族会)によって重要文化財に指定されている社家の系図が虫干しを兼ねて公開されている。10 月には他地域に居住している社家の人たちも集まり祖先祭を執り行っている。明治になり社家制度が崩壊したとはいえ、社家の人たちの組織として結成された同族会は今も引き続き種々の活動を続け維持されている。しかし、社家も古くは文明 8 年(1476)の一社騒乱があり、その内部にはどのような組織も同様であるが複雑な人間関係は当然存在する。

一方で、明治になるまで社家の小作人であった農家は、愛宕講などの各種の講をはじめ、現在もさんやれ祭、やすい花などの独自の伝統行事を今も続けている。これらに社家の人たちが組織として加わることは今でもない。9 月 9 日の重陽の節句に行われる烏相撲は、農家の子供を中心に現在はそれ以外の子供達も参加して行われる。5 月 5 日の競馬に使われる馬は、農家で馬が飼われていた昭和 28 年ごろまでは農家から馬が提供されていた。

上賀茂地域は、このように古くからの多くの伝統行事を粛々と今に至るも地元の人たちが伝えてきているが、あくまでも地域の行事としての意味を色濃く残して引き継がれてきている。現在は、このような行事が社会的にも珍しくなり、新聞などで紹介されるようになり見物に来る人々も毎年増えるようになってきたが、上賀茂の地元ではとくにそれを社会に発信しようとは考えていず、地域の行事としての性格を維持してきている。しかしそのために素朴に行われる行事が、関係のない半プロの写真家の目に余る行動で、行事の清々しい雰囲気^{きんぎ}を乱しだしていることは問題である。

上賀茂の社家町は、かつて社家が集住していた地域であり、現在では全国的にも珍しくなり昭和 63 年には国の重要伝統的建造物群保存地区(伝建地区)に選定されている。しかし、「伝建地区では町おこしはしない」との申し合わせもあるようである。そのことが、騒がしい観光化を防いでいるが、一方で地元の人達自身が地域の歴史・文化に関心を持たない状況も作り出している。

以上のように、古くからの地元の人たちの蔭での支えの基に伝統行事などは続けられているが、古くからの家がだんだんと少なくなり、新たな住宅開発に伴う新住民の増加は、従来の形のみを踏襲しているのでは徐々に維持が困難になりつつあるのも事実である。地元の方がさんやれ祭のことを学区の上賀茂小学校で話をしたが、知っている子供は 1,2 人であったというのも現実の姿である。新たに上賀茂に居住しだした人たちも加えて、改めて地域の文化・歴史に関心を持ち、支えていくことが急務の状況にある。

古くからの人にも、新たに居住してきた人にも上賀茂に関心を持ち、地元に誇りと愛着を持ち、また地域に新たな協力関係を構築することが必要であるが、この一つの方法として、かつて上賀茂地域で輩出した人をみんなで顕彰することである。このような考えの基に、江戸末期の歌人である賀茂季鷹の歌碑の建立を地元にて提案した。その経緯と結果について考察する。

2. 賀茂季鷹について

賀茂季鷹について、文献1の主要部分を要約すると以下のようである。

賀茂季鷹(本姓山本氏)はその江戸時代後期に現れた上賀茂の文化人たちの頭目とも言える存在であった。季鷹(すえたか、1754-1841年)は上賀茂神社の祠官であった賀茂県主族の季(すえ)の一流の家に生まれ、山本家を相続した。当時の上賀茂神社の祠官たちは宮中の公家(四、三位)、北面の武士、諸官人や宮家の家司などの兼職をもつ者が多かったので、彼も12歳の時から当時の代表的な歌人であった有栖川宮職仁親王^{よりひと}に仕えて、親王から和歌と国学の手ほどきを受けた。生来伶俐であり、学業の進捗も著しかったので、親王から将来を大いに囑望される存在となった。親王が薨去された後の1773年に20歳で季鷹は当時の国学の東の中心であった江戸へ行き、三嶋自寛と荷田御風の門下に入って和歌と国学の研鑽に励んだ。江戸における交友は当時の国学者たちを網羅している。これら二人の他に加藤千蔭、村田春海や太田南畝も親しい友人であった。

季鷹は江戸滞留19年の後、妻子を伴って上賀茂へ帰った。父が病没したためである。その後は京都に留まって、上賀茂の居宅を「雲錦亭」と名付け、邸内には柿本人麿と山部赤人の木像を祀る「歌仙堂」を建てた。これらの建物は今なお上賀茂の山本家邸内に200年の風雪に耐えて残されている。

上賀茂神社の祠官として勤める傍ら、文人や墨客を自邸に集めて歌会を催し、また多くの門人に国学と和歌を教えた。都は勿論、地方からの訪問者が絶えなかったと伝えられている。彼の文学研究の成果は「伊勢物語傍注」や「万葉集類句」などの著作となったが、歌作りには殊に精を出し、「雲錦亭歌集」など多数の歌集を出版している。88歳の高齢で彼が死去したのは明治維新の30年前であった。北区の西山墓地には季鷹の墓があり、墓石には彼の第一の門人である松田直兄によって墓碑銘が刻まれている。また、彼の著作や膨大な所蔵書籍は現在、京都市立歴史資料館に寄託保存されている。

彼が当時の第一級の歌人、国学者であったことは彼の交友が歴史的に名高い文人たちであったこと、また彼の文化サロン「雲錦亭」に集まった庶民を混じえた多彩な人々による創作活動が京都第一の地と高く評価されたことから明らかである。

3. 歌碑建立までの経緯

賀茂季鷹を取り上げた理由は3つある。その1つは、過去の人物を顕彰するについては、歌人の歌碑は最もふさわしいし、差し障りが少ないと考えられたこと。第2には、現在も賀茂季鷹が居住していた社家屋敷である雲錦亭と歌仙堂が現存し、子孫にあたる山本須磨子氏(90余歳)が住んでおられることであった。そのため、地元の人たちも色々な意味で関連があり、関心も持ちやすいことに

ある。他の人物は、既に上賀茂地域には住居などが残っておらず、子孫の方も必ずしも消息が明らかでなかった。第3には、以上のこともあり、トヨタ財団の助成課題「近代化とくらしの再発見」に対して、「賀茂季鷹など江戸期における賀茂文化人と賀茂地域文化の調査・研究」をテーマとして応募し採択されたことである。

歌碑建立までの経緯と出来事をまとめると以下のようである。

1) 賀茂文化研究会は、平成15年5月にトヨタ財団の研究助成を受けるために既存の3団体を中心にして発足させた²⁾。トヨタ財団の助成が決まった10月から研究会内部では賀茂季鷹の歌碑が造れないか話が出されていた。折に触れ地元で季鷹のことを話題にし、地元の反応を調べた。地元の反応の代表的な意見は「社家のことをなぜ我々がしなければならない。」であった。一般論としての社家に対する地元の他の人たちの反発は今も根強いものがある。これについては「社家だから顕彰をしようとするのではなく、たまたま季鷹さんは社家の出であっただけである。」と説得した。山本家が「スエタカ」という言葉と関係があるということは、古くからの地元の人たちの多くは知っているが、賀茂季鷹が何をした人であるのかが既にあまり知られていないようになっていたため、明確な反対する理由がなく必ずしも賛成ではなくても表面的には納得が得られたようであった。著者はそれまでに種々の行事などを行ってきており、それなりに認知されるようになってきていたので、好意的な意味でまた何かやろうとしているようだと認識であったと思われる。

地域を代表する団体などの役員の方々、上賀茂の開発が進みだんだんと普通の地域と変わってきてくること、すなわち地域の文化や歴史が風化し失われていくことに危惧を感じ出していた。そのため、何らかの文化的な事業をして地域の歴史・文化を後世に伝えていかなければならないとの思いがあったので、歌碑の建立について好意的な反応が返ってきた。「スエタカ」と言う言葉は60歳代以上くらいの多くの人は知っているが屋号か何かと思っている人も少なくなく、「スエタカ」が人物の名前であるという事実が知られているとは限らなかった。さらに、それより若い層は言葉そのものも知らない状況になっていた。

2) 平成16年12月に機会があり賀茂文化研究会の3人(著者含む)で話し合い、歌碑建立について話を進めることと、京都市からの助成がもらえないかを打診することとなった。

3) 平成17年1月13日に、京都市3名と賀茂文化研究会の3名(著者含む)で話し合いの場を持つことができた。京都市からは、以下の条件が満足できれば歌碑建立について助成の可能性があるとの好意的な返事がもらえた。その条件は、

- a) 上賀茂郷界わい景観保全地区内、または重要伝統的建造物群保存地区内であること
- b) 地元住民の全員の賛成があること

であった。a)の条件については、さらに山本家(賀茂季鷹旧宅)が何らかの形で市の指定を受けていれば好都合であるとの話であった。このことについてすぐさま調べたところ、山本家は上賀茂郷界わい景観整備地区の中の界わい景観建造物に指定されていることがわかった。直ちに京都市に伝えた。このことが話し合いの席で分からなかったのは、正確な地図の上で話をしたわけではなかったこと、その

地図に界わい景観建造物が記入されていなかったこと、および事情があり山本ではなく他の姓で京都市に登録されていたために京都市の担当者も気が付かなかったわけである。b)は大変難しい条件であった。しかし、京都市の意図としては、助成はしたが後から地元から反対などの苦情が来る、まして議会で反対が取り上げられたら大変困ることで、このことを嫌ったと考えられる。このように解釈すれば当然のことと言える。

4) 平成 17 年 2 月 14 日に、京都市の提案について賀茂文化研究会のメンバー(著者含む)と上賀茂の主要団体の長が集まって協議した。上賀茂自治連合会、上賀茂町並み保存会、明神川美化保存会、賀茂文化研究会である。また、集まったメンバーは、全員が賀茂文化研究会の顧問や会員でもあった。第一回の歌碑建立準備会とした。その結果、京都市条件 b) は、地元によく周知し、理解と賛同が得られるように広報を積極的に推進することと、地元で最も広い範囲をカバーし、かつ全員が加入している団体は上賀茂自治連合会であるから、ここの賛成を得ることによって全員の賛成が得られたと判断して差し支えないとした。さらに平行して建立場所の選定、和歌の選定、石材の選定、それによる募金額の決定などを進めることとした。

5) 杜家の集まりである賀茂県主同族会においても従来から賀茂季鷹の歌碑の建立を考えていた様子もあり、上記のことから同族会会員の人に同族会も協力して進めることについての打診をお願いした。その回答は「同族会では既に 2 年ほど前に、このようなこと(歌碑などのこと)を進めようと思って京都市の然るべき人に山本家が何らかの指定を受けているか調べてもらっている。返事を待っているところである。余計なことをするな。」と言うような調子であったということであった。著者がたった 1 時間ほどで調べたことを 2 年間じっと待っているという辛抱強さは如何にも 1300 年以上の伝統のある上賀茂らしいところであるが、2 年間も放っている京都市の然るべき人の無責任さも呆れたものである。この京都市の方は、自分の必要なきには地元の人たちを利用している人であるから同族会も自分たちの依頼も誠実に実行してくれると信用して待っているわけであろう。

著者は上賀茂地域の融和と協調を目的にしているのであって、対立や混乱を深めるために活動を進めているのではないと強く主張し、その後も同族会とは人伝に何回かのやり取りを行ったが、同族会と他の人たちが協力していくのは時期尚早であり到底無理であるとの意向を受けて、今回の計画に同族会の参加・協力をうることはあきらめざるを得なかった。必ずしも同族会全体の意思ではなく、強く反対する一部の人がいるのと言うのが実情らしかった。なお、その後同族会は自分たちだけで賀茂季鷹を顕彰するとして、上賀茂神社の一の鳥居脇に神社と連名で駒札を建てた。

6) 平成 17 年 7 月 7 日に、上賀茂自治連合会は幹事会を開催し、歌碑建立に協力することを決めた。

7) 平成 17 年 7 月 11 日に、京都市 2 名、賀茂文化研究会 2 名で建立地未定のまま、見積書を提出して助成金支給の可能性について話し合われた。後日、京都市は「基本的に受理し、詳細は内部で検討する。」として、前向きの姿勢を示してくれた。また、京都市の次年度事業とするためには、地元で早急に歌碑建立の取り組みに着手するようにとの指示を受けた。従来、京都市は「賀茂は動きの鈍いところ」との感じを持っていたが、それが地元から新しい提案があったことを評価してくれたようで

ある。その後も京都市はすべてについて好意的に対応してくれたのは有り難いことであった。

8)平成17年7月13日に、山本家は、歌碑を敷地内に建立することについて、「受け入れる」との返事があった。

9)平成17年7月16日に、賀茂季鷹歌碑建立委員会の第一回の会合を上賀茂消防会館会議室で開催した。ただし協議の結果、これは第二回の準備会に変更となった。参加団体は上賀茂自治連合会、上賀茂町並み保存会、明神川美化保存会、賀茂文化研究会(著者含む)の11名である。ここでは以下の意見が出され、合意された。

a)上賀茂自治連合会は、いつも上賀茂社会福祉協議会(「社協」と略して呼ばれる)と一緒に活動をしている。今回も社協にも働きかけて賛成が得られれば一緒に活動を進める方が望ましい。その場合、同時にスタートした方が良いので、今回の会合は準備会として、社協の賛成が得られれば改めて第一回の建立委員会を開いた方が良いとの意見があり、全員の同意のもとに社協に呼びかけ参加を要請することとなった。それ故、今回の会合は第二回目の準備会となった。

上賀茂地域での各団体の関連が分からなかったことから社協には声を掛けていなかったわけであるが、地元の意見でよりよい方向に進めることが出来た。このようなことは慎重に進めてきたが、長年地域に入っている、幾つの団体がそれぞれどのような様な立場で、どのような関連で活動しているのかなどは把握が困難である。上賀茂地域は歴史が長く古い状況が維持されているから大げさではなく50以上の団体があるのではないだろうか。たとえば、子供の安全を取り上げて関連する団体は少年補導、安全推進会など6つの団体が関連する。各団体の表面的な仕事以外については少々の説明を聞いたりは紙の上だけでは分からない。また地域によってそれぞれの役割や団体間の関連は異なり、声を掛ける順番を間違っても物事が進まなくなることはどのような集団でも同様であり、最も難しいことの一つである。なお、社協の会長は自治連合会の幹部メンバーでもあり、今回の会合に出席していたので、社協の賛成が得られることはほぼ間違いなかった。

社家の集まりである賀茂県主同族会は、その趣旨から上賀茂地域外の会員も多く地域の団体としては認識されていないことから話には出なかった。省略するがここでは記述しない別の理由があることもほぼ明確なことである。

b)今回参加の各団体は、賀茂季鷹の歌碑建立について同意し、協力する。

c)8月には京都市で来年度予算の検討が始まるために、それまでに地元の方針を纏めることが必要なことと、今回参加の各団体が歌碑建立に賛成であること、および賀茂文化研究会は会誌「賀茂文化」の発送の時にしか会員に寄付の呼びかけが出来ないことから、先に募金活動を始めることについて了承が得られた。

10)平成17年7月29日に、京都市と自治連合会長など10数名(著者含む)と現地視察を行った。伝建地区の様子は分かっているとのことで、その他の候補地として大田神社の摂社である福德社の西側の空地、大田神社境内、本命である季鷹旧宅である山本家を調査した。条件が揃えば山本家が一番適当と言うことで意見が一致した。京都市内部で検討することを約束してくれた。このことを受けて、

その場で第一回の賀茂季鷹歌碑建立委員会を8月9日に開くことを決めた。なお後日、京都市より申請を受理する旨の連絡があった。

11)平成17年8月9日に午後7時半から上賀茂小学校のふれあいサロンで約30名が集まり、第一回の賀茂季鷹歌碑建立委員会を開催した。著者が司会をし、以下のように会議を進めた。

- a) 歌碑建立の趣旨説明と今までの経緯の報告
- b) 歌碑建立についての承認
- c) 金谷章太郎委員長、勝矢淳雄(著者)、初田耕治両副委員長、梅辻 諄会計の選出
- d) 募金額(90万円)と募金活動の開始の決定
- 万が一、京都市の助成が受けられなかった場合も、地元独自で歌碑建立を進めることを決めた。
- e) 和歌の選出経緯の説明と承認
- f) 建立地の承認
- g) 石材と施工業者の承認
- h) 構成団体の承認
- i) その他

ここでは予想外に色々の意見が出された。今までの地元の人間関係の縮図が示されたともいえる状況であった。とくに提起された二つの問題は以下のようなものである。一つ目は、建立地については、伝建地区の枯れた柳のところが観光客のために適切であるとの意見であった。これについては石碑の大きさに比べ場所が狭すぎるとのことではぼ了承が得られたが、それなら同所の藤木社のところとの意見が出された。この意見については前もって出されることが分かっていたので、植物の専門家に尋ねたところ、500年以上経った樹木は少なくとも枝の範囲の根元の周辺には重いものをおかずに土をそとしておくべきであるとの示唆を受けていたので、このことを述べて理解を得た。伝建地区の枯れた柳について、過去の経緯から近隣の問題などが強く出されたが、今回の議題ではないとして取り上げることはしなかった。このことについて、少なからずの不満が残ったようである。

山本家の敷地内が適当との話が進んだが、あのような場所では観光客が来て、自動車を周辺に止めれば周辺の家が困るではないかとの意見が出された。歌碑を一つ建てたからといって周囲が困るほどの観光客が急に来ることは考えられないと述べ、結局、山本家の敷地内が適当となった。

二つ目の問題として、山本家の敷地内に建てるということは、山本家に歌碑を寄付するののかとの質問が出された。そうではなく、歌碑はあくまで建立委員会のもので場所を借りるだけであるとの回答をしたところ、それでは山本家と土地を貸借するという契約書を交わすようにとの意見であった。次回までに山本家とそのような契約書を交わすとの約束で、建立場所は第一候補として山本家の敷地内と決まった。

募金活動は、それぞれの団体で協力しながらも独自に進めることとなった³⁾。なお、社家の団体である賀茂県主同族会は委員会の構成団体にはなっていないが、募金活動には積極的に協力をしてくれて、社家の全世帯に寄付依頼のチラシを配付してくれた。

歌碑建立委員会構成団体は、上賀茂自治連合会、上賀茂社会福祉協議会、明神川美化保存会、上賀茂町並み保存会、賀茂文化研究会となった。顧みれば、この委員会が一番の山場であったといえる。その後は、大きな支障はなく進められた。

12) 平成 17 年 12 月 12 日に山本家と歌碑建立委員会との間で歌碑建立地の無償貸与について契約書を交わした。

13) 平成 17 年 12 月に京都市の助成が内定したとの連絡を受けた。

14) 平成 18 年 1 月 29 日、昨年までの防火研究会が上賀茂文化フォーラムとして再出発、上賀茂小学校のふれあいサロンで開催され約 30 名の参加者があった。ここでほぼ予定額近くまで集まった募金状況を説明した。その際、金額の問題ではなく、地元の出来るだけ多くの人に参加・協力してもらい、地元で自らが進めた事業としての意識を共有してほしいことと広報の意味もあり、地元で再度募金をお願いした方がよいとのことで、自治連合会から地元へ回覧をまわし寄付のお願いをすることとした。

15) 平成 18 年 4 月 20 日に、京都市と地元 3 名とで話し合いの場をもった。京都市から正式に助成を決めたことの説明があった。金額については未定で、手続きについて説明を受けた。季鷹の子孫である山本須磨子氏が 90 数歳の高齢であり、入退院も繰り返すようになってきていたので、早急に歌碑建設に取り掛かりたい旨を京都市に伝えたが、最終的な助成額の決定や市内部の最終決定があるまでは着手をしてはいけないと言われ、やきもきしながら日を過ごすこととなった。

16) 平成 18 年 6 月 16 日に、京都市からの申し出があり、急遽、上賀茂小学校ふれあいサロンで京都市と地元 3 名で京都市の話を聞いた。京都市の話は「石碑建立の趣旨は理解しているが、界わい景観整備条例に前例がない。したがって、界わい景観建造物に指定されている土塀の修復を提示してほしい。石碑は土塀修復の一部として対応したい。」との旨であった。

17) 平成 18 年 6 月 20 日に、建立委員会幹部の 4 名(著者含む)が集まり、京都市の提案について協議した。山本家の意思にもよるが、基本的に京都市の提案を受けることで意見がまとまった。京都市には直ちにその旨を連絡した。

18) 平成 18 年 6 月 25 日に山本家と相談し、土塀修復について快諾を得て、京都市に連絡した。その後、7 月 13 日まで京都市と建立委員会メンバー、山本家、業者と種々の事務手続きについて電話、市訪問、現地調査などで協議、説明などを受けた。これらの具体的な打ち合わせ作業は出来るだけ地元にお任せし、重要なときを除いて著者はあまり関与しなかった。

19) 平成 18 年 7 月 21 日に山本家において、京都市 3 名、建立委員会 3 名(著者含む)、山本家 3 名で正式に申請書などを作成し、京都市に提出した。

20) 平成 18 年 8 月 7 日に、第二回建立委員会のための打ち合わせを会長と著者でした。

21) 平成 18 年 8 月 10 日に上賀茂小学校ふれあいサロンで第二回の賀茂季鷹歌碑建立委員会を出席者約 10 名で開催した(写真 1)。著者が司会をして募金状況、京都市への助成の申請状況、着工の時期、除幕式とその内容、祝賀会、記念のシンポジウム「上賀茂の文化を語る」の開催などについて報告と相談をして了承をえた。京都市の助成が決まり次第、直ちに建設にかかることとした。土塀の修復と

歌碑建立に約3週間かかることで、その後余裕を見て除幕式・祝賀会を開くこととしたが、一方でシンポジウムの日程が既に決まっていることなどから調整を行った。多くの方々の善意の寄付で歌碑建立が可能になったこともあり、除幕式・祝賀会とも無駄な経費を使わないように出来るだけ質素に進めることで了承を得た。当日現在で、195名の方から寄付をいただき、総額は募金予定を超えて100余万円となった。

22)平成18年9月28日に除幕式と祝賀会を行った。ぎりぎりの完成となり、土塀はまだ生乾きの状態であった。上賀茂神社安井正明権禰宜の祝詞奏上に続き、賀茂季鷹ご子孫で90数歳になられる山本須磨子氏による除幕、そして建立委員長、自治連合会長などの玉串奉奠を執り行った。快晴に恵まれ約40名の参加者で完成を祝った(写真2、3)⁴⁾。祝賀会は京都産業大学同窓会館で行った。その際、駒札の建設が了承され、駒札の説明文は作者である盛田帝子氏から紹介された。

23)平成18年10月7日、歌碑建立を記念してシンポジウム「上賀茂の文化を語る」(第4回 賀茂季鷹とその時代)を京都府、京都市をはじめ新聞社などの10団体の後援のもとで大谷大学で開催した。基調講演 盛田帝子「賀茂季鷹とその周辺」、事例研究 梅辻 諄「全国の季鷹歌碑巡りと各地域での評価」、山本宗尚「地下官人賀茂季鷹と賀茂の氏人たち」、市 忠顕「季鷹も見た賀茂の競馬」、勝矢淳雄「季鷹も居住した社家屋敷と社家町での環境学習活動」。約200名の参加者で盛況であった(写真4)⁵⁾。



写真1 第二回賀茂季鷹歌碑建立委員会



写真2 歌碑除幕式



写真3 賀茂季鷹歌碑

4. 考察

足掛け3年かかったが、京都市の好意的な対応をはじめ多くの方々の善意に恵まれほぼ順調に歌碑建立にこぎつけることが出来た。その中でも幾つかの問題を考察すると以下のようである。



写真4 シンポジウム「上賀茂の文化を語る」

1) 地域の人間関係

当然ながら、歌碑建立以前から地域の種々の人間関係はあるわけである。歌碑建立委員会は地域の代表的な各種団体の長を集めて構成されているために、どちらかといえば動きの重い団体となった。そのため、実際の活動は委員会に諮ることなしに進めることも多くなったが、この点が今まで

の人間関係とのことを含めてそれぞれの長の個性と方法もあり難しい問題を生じさせることも少なからずあった。どの様なことを進めるときでも同様であるが、その対応のための調整は一番氣を使ったところである。今回は著者の今までの種々の活動による地元の信頼感と地元の住民でなかったことが対応する場合に都合が良かったといえるが、研究者が一般に避けるリスクが大きくまた時間が掛かる役割りではあった。じっと話を聞くことが大切であった。これが一つの解決の手段であった。たとえば、2日間にわたり計6時間じっと話を聞くということもあった。どの様な場合も基本的には話を聞くことに徹して対応したが、このことが長期的には地元の人間関係を保つ上で良かったと考えている。その他の細々した問題は多数あったようであるが、地元の委員が対応したので、著者の耳には多くは入ってこなかった。

社家の団体である賀茂県主同族会との関係は、上手く進めることは出来なかった。自分たちが先に考えていたとの思いが反発の原因の一つになったようでもあるし、従来からの社家と他の人たちとの関係を顕在化させてしまったとも言える。ただし、同族会も歌碑建立のための寄付集めには積極的に協力をしてくれており、全国にいる社家の全世帯に寄付依頼のチラシを配付してくれた。これが寄付金の集まりの大きな原動力になったことは心に留めておかなければならない。

2) 歌碑建立の地元への影響

山本家は当然のことながら喜んでおられるし、山本須磨子氏が90数歳で近隣の方々も日頃から心配されていたこともあり、崩れかけた土塀もきれいになって環境が良くなったこともあり、近隣の方々も含めて地元は好意的な雰囲気にあると感じられる(写真5, 6, 7)。良い意味で「上賀茂も変った」との話も聞かれるようになった。社家の人たちと農家やその他の人たちが一緒に参列し、歌碑建立を祝えたのも上賀茂に新しい風を吹かせた出来事の一つではなかったかと考えている。



写真5 修理前の山本家土塀(1)

第一回の歌碑建立委員会のときにも提案していたのであるが、次には北大路魯山人誕生地の石碑を建てようという話も話題になるようになってきた。解決しなければならない物理的な難しい問題があり、直ぐには魯山人の石碑建立は出来ないが、今回の賀茂季鷹の歌碑建立は従来から京都市からも言われた「動きの鈍い上賀茂」とは異なり前向きに地元を良くする物事を進めようとする気持ちが地元で動き出す一つのキッカケになったといえる。



写真6 修理前の山本家土塀(2)

歌碑建立は上賀茂地域の9割以上の人々からは喜んでもらえたと考えている。次に予定している北大路魯山人の石碑については杜家の同族会も賛成の方向で動いているとの話も聞こえており、地元が協力して建立することが出来るかもしれない。ただし、魯山人の顕彰を強く反対している人も同族会の中にはおられるとの話も聞いており、ゆっくりと慎重に進めなければならない。多様な価値観と言ってしまえばそれまでであるが、どんなことでも人数が多くなれば全員の賛成を得ることは極めて困難であり、意を尽くして説明しても



写真7 歌碑建立後の山本家

同意を得ることができない場合もある。周囲の人たちの判断が「やむなし」となれば、それ以上は仕方がないとして事柄を進めざるを得ないことと考えられる。ただし、今回も地元のある人は「よそ者(著者のこと)と一緒に勝手なことをやっている、そのうちに罰が当たるぞ」と直接かあるいは間接に言われたという話もあることを心しておかなければならない。

3) 賀茂文化研究会の活動の方向

上賀茂地域に着目し研究や地域貢献活動などをはじめてから10年以上が経過し、賀茂文化研究会を立ち上げ活動を広げてから4年になる。この間、種々の活動を進めてきたが⁶⁾、今回は初めて上賀茂自治連合会などの地域の諸団体と一緒に賀茂季鷹の歌碑の銘板に賀茂文化研究会の名前を刻むことが出来た(写真8)。賀茂文化研究会が上賀茂地域の活動団体として認知されたことを意味するものであり、その意義は大きいといえる。

遊びの要素が多いあるいは時代的话题になっているテーマのような行事には若年層をはじめとして多数の参加者があるが、単なる一過性のもので直ぐに忘れ去られてしまうことが多いし、後に有意義な結果を残せることが少ない。一方で、少しでも真面目なテーマあるいは有料の行事になると参加者

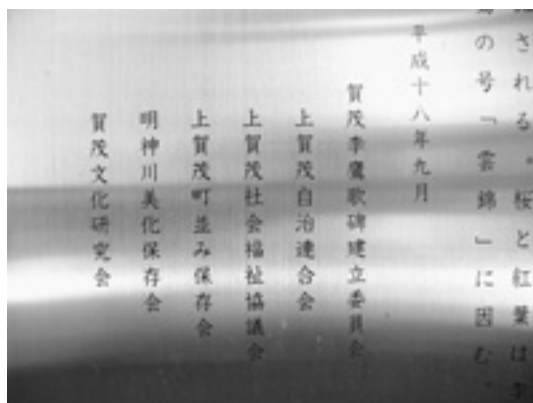


写真 8 賀茂季鷹歌碑銘板

を集めるのに苦労するのは一般的な事実である。今回の歌碑建立は寄付をお願いすることからどの程度の協力が得られるかに大きな不安があったが、地元内外の 200 名足らずの方々からご寄付をいただけたことは予想外のうれしい出来事であった。真面目な取り組みに賛意を表してくれる方々も多いことが理解できたことは、今後の活動の精神的な大きな基盤である。賀茂文化研究会の活動としても、一定の方向性が示唆されたといえる。すなわち、今後は単なる人集めの行事を行うのではなく、会誌の発行など地道であっても次に続く形の

残る着実な活動を進めることが大切である。今回の歌碑建立はこの点から見て、賀茂文化研究会にとっても上賀茂の地元にとっても意義が大きかったものである。

本研究活動を進めるにあたっては、地元の多くの方々のご協力や有益なご教示をいただいた。ここに記して謝意を表する次第である。なお、本研究は京都産業大学総合学術研究所およびトヨタ財団の助成を受けた。

参考文献

- 1) 梅辻 諄「賀茂季鷹の歌碑を建てよう」、賀茂文化、第 2 号、平成 17 年 4 月
- 2) 京都新聞「上賀茂 伝統文化・景観守れ 京産大教授ら「研究会」を設立」平成 15 年 10 月 23 日
- 3) 京都新聞「賀茂季鷹の歌碑建立へ ― 地域の誇りに ―」平成 17 年 8 月 25 日
- 4) 京都新聞「賀茂季鷹の歌碑完成 ― 自筆の作品刻む ―」平成 18 年 9 月 29 日
- 5) 京都新聞「地元ゆかりの歌人・賀茂季鷹しのぶ―北区で上賀茂の文化語るシンポ―」平成 18 年 10 月 8 日
- 6) 勝矢淳雄「バイオリージョナリズムに基づく上賀茂地域での民学連携による地域活動の展開」京都産業大学総合学術研究所所報、第 4 号、平成 18 年(2006)7 月
- 7) 京都新聞「上賀茂の歴史と文化紹介 ― 地元の研究会が会誌創刊 ―」平成 16 年 9 月 4 日